

平成 30 年 5 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870013

研究課題名(和文) ウランバートル周辺居住区における街路空間の調査と住民との協働観測による問題の共有

研究課題名(英文) Investigating the urban space in Ger district, Ulaanbaatar and collaborating the local residents

研究代表者

滝口 良 (TAKIGUCHI, RYO)

北海道大学・文学研究科・共同研究員

研究者番号：50706760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ウランバートル市のゲル地区において、4ヶ所合計730戸の住民から街路空間と近隣関係に関するアンケート調査を実施した。分析の結果、住民の居住歴、居住形態、当該地区の成立時期に応じて住民の地域に関する知識、協力行動、地域への愛着に差異が見られた。ゲル地区は一般に住民関係が希薄でコミュニティの基盤が脆弱とされるが、地域により住民の近隣関係や公共空間への関与に多様性があることが示された。本研究の成果は、学術論文・報告として発表するとともに、モンゴルにおいて市民向けの書籍、講演を実施するなど、研究成果の調査対象地域への還元につとめた。

研究成果の概要(英文)：We had a questionnaire survey about street space and neighbor relations from 730 units in 4 places in the Ger Area in Ulaanbaatar. On analysis, there are differences in residents' knowledge of the community, cooperative behaviour, and attachment to the community depending on their history of residence, residential styles, and the foundation of relevant areas. People in the Ger Area have poor interpersonal relations and weak foundation of the community in general, however, there is diversity of the involvement in neighborhood relations and public space depending on areas. We have tried to return the profit of this study result to the study areas by publishing an academic article and a report, and also publishing a book and giving a lecture for citizens in Mongolia.

研究分野：文化人類学、地域研究(モンゴル)

キーワード：都市空間 コミュニティ ポスト社会主義 モンゴル

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会主義体制の崩壊後、モンゴルの首都ウランバートルでは、地方からの人口流入によって市街地周辺のインフォーマル居住区の拡大が問題となってきた。この地区は、住民の多くが遊牧民の伝統的な移動式家「ゲル」に住むことから「ゲル地区」と呼ばれる。近年、生活環境の悪化が深刻化するゲル地区では、従来のトップダウン式の開発手法に代わり、地域コミュニティを開発することで、彼らを地域開発の主体とする計画が数多く行われている。

これまで申請者は社会主義体制から現代にいたるゲル地区の住宅と街路の歴史的変遷を研究してきた。社会主義体制下においては50戸程度からなる「街路」(gudamj)という住民組織が街路空間の管理を行っていた(滝口 2013)。体制崩壊後に「街路」のほとんどが解体したことで街路の管理は失われた。その後ゲル地区では、土地私有化政策の開始とともに管理不在の街路の荒廃(土地囲い込み、ゴミの不法投棄)が大きな問題となっていく。申請者は、土地私有化政策に関する調査を行い、土地私有化政策が街路の秩序回復をもたらさず、反対に街路空間に対する住民の機会主義的な行動を生み出す要因となったことを明らかにしてきた(滝口 2009)。

2. 研究の目的

本研究は、モンゴル・ウランバートル市の周辺居住区(ゲル地区)における住民の街路利用の調査を通じて住民生活の空間的広がりや街路空間の成り立ちを解明する。これによりゲル地区住民の街路における行動環境に関する基礎研究を完成する。

(1) 街路空間の成り立ちを住民の街路利用・インフラアクセス・近隣関係から明らかにする。

(2) 地理情報システム(GIS)上での空間表現を通じてゲル地区のコミュニティ形成に寄与する基礎的データを準備する。

(3) 調査ならびに研究結果を地域住民に共有し、問題意識の共有を図る。

3. 研究の方法

(1) ゲル地区を構成する街路の歴史的機能と空間の成り立ちを解明する。ゲル地区における「街路」という空間が過去にもっていた機能と今後の可能性を検討するために、社会主義時代の「街路」に関する資料調査を行うとともに、当時を知る住民から聞き取り調査を実施する。

(2) 今日のゲル地区住民の街路空間の利用と近隣住民との関係の広がりやを明らかにする。街路と近隣住民に関する知識、街路での行動、近隣住民との協力行動、地域への愛着についての質問項目を準備し、住民に対するアンケート調査を実施する。この際、調査対象者の居住期間(社会主義時代/市場経済

化後)居住ステイタス(土地所有者/非土地所有者)等の属性が与える影響も考慮にされるため、これらの項目も調査時に記録する。

4. 研究成果

(1) ゲル地区の街路に関する歴史調査

政府・国際機関によるゲル地区の都市開発に関する資料調査を行い、近年のウランバートルの開発が従来のトップダウン式のものから住民の意思決定を重視したボトムアップ式のものに移行しつつあることを確認した。この際、40戸から80戸程度で構成される「通り」が住民の組織化の一つの単位として考えられていることが明らかになった。さらに、現地調査によるゲル地区における家庭の土地利用ならびに街路管理に関する聞き取りの結果、社会主義時代のゲル地区においては移動式住居ゲルを用いた共同居住が相互扶助的に行われていたこと、社会主義体制崩壊後においてはこうした共同居住の相手が親族に限定されたり、有償化されるなどの変化が現れていることが明らかになった。

(2) ゲル地区の街路に関する現地調査

ウランバートル市の最古のゲル地区の一つ「ガンダン」において330人の住民から街路関係と近隣関係に関するアンケート調査ならびに複数戸からのインタビュー調査を実施した。ガンダンでは近年街路改善計画が進められており、そのために住民の協力・組織化による各戸の土地供出と街路の拡大が要請されている。調査の結果、同地区では市場経済化後、高騰する地価の影響により住民の流動性が高まるとともに近隣関係が疎遠化しており、敷地の不法拡大による街路の狭小化や廃棄物の街路への投棄による街路環境の悪化に対して住民が大きな不満を有していることが明らかになった。さらに、住民説明会の実施には住民の土地供出意志の形成に一定の効果があることが明らかになり、住民組織形成への行政の介入の有効性が示唆された((5)学会発表)。

19世紀以来つづくゲル地区「ダンバダルジャー」にて100戸を対象にアンケート調査を行った。さらに5軒を対象に住宅の実測調査およびインタビュー調査を実施した。

住宅の実測調査およびインタビュー調査により、家族の成員の独立や親類・知人の受け入れといったライフイベントのなかで、住民がゲルや家屋の増改築を行い住宅敷地内を柔軟に運用していることが明らかになった。とりわけ注目されるのは家屋のセルフビルド率であり、調査の対象となった家庭の多くが家屋を自力で建設していたことである。敷地内の柔軟な運用、家屋の自力建設はゲル地区の住まいに共通する特徴であることが示された(図1)((5)雑誌論文)

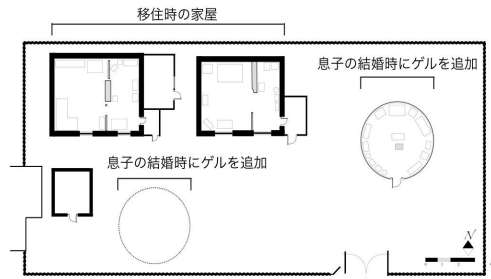


図 1. ゲル地区の住宅の実測図

上記の比較的形成時期の古いゲル地区と比較するべく、市場経済化後の 2000 年代、2010 年代に形成されたゲル地区を 3 箇所選出し、計 300 戸に対し同様のアンケート調査を実施した。その結果、新旧のゲル地区において街路の改善に関する協力意識に大きな異同はないものの、近隣住民に関する知識、近隣住民との協力行動は市場経済化後に形成された地区においては顕著に低い結果が示された。他方、将来の移住を希望する住民の割合は新旧の住民に共通して高いことが示され、こうした移動への志向はゲル地区の地域コミュニティの組織にあたり否定的な要素となることが予想される。

④上記①～③の結果について統計的なデータ処理を行うとともに、地図上にプロットすることで調査結果の地図データによる把握につとめた(図 2)。



図 2. 水汲みに関する住民の協力行動の地図データ化

(3) モンゴルの伝統的コミュニティ空間に関する検討

モンゴルの遊牧における固有の共有空間と現行の地域開発が前提する空間との関係について共同研究を実施した。モンゴルの牧地という共有空間が移動に基づく非固定的な境界と柔軟なメンバーシップを特徴とするのに対し、政策としてのコミュニティ開発が要請する固定した境界とメンバーシップの理念が大きく異なることが明らかになった(5. 雑誌論文)。モンゴル固有の共有空間に関する以上の理論的検討は、ゲル地区の共有空間としての街路への視角を広げるも

のとなった。

(4) アウトリーチ活動

研究成果の現地へのアウトリーチ活動として、以下の活動を行なった。ゲル地区の歴史と現状に関する市民向けハンドブックとして『ゲル地区の発展とコミュニティ』をモンゴルにおいて出版(モンゴル語)、現地において無料配布を行なった(図 3)。

名古屋大学アジアサテライトキャンパス主催サイエンス&カルチャートーク in モンゴルにおいて「ゲル地区：発展か、建設か？」を発表。さらに、ゲル地区支援の活動を行う NGO 組織 Ger Community Mapping Center による野外展覧会「Tale of Two Cities: Outdoor Exhibition in the Ger Area of Ulaanbaatar」において研究成果の一部をパネルにて公開した。

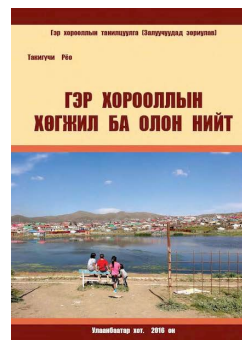


図 3. ハンドブック『ゲル地区の発展とコミュニティ』書影

(5) 研究ネットワークの構築と共同研究

ゲル地区は、モンゴル固有の都市の居住形態であり、その急速な拡大によって多くの都市問題を抱える地区でありながら、いまだ研究がとぼしい。こうしたゲル地区の研究の基盤となる研究ネットワークを構築するべく、ゲル地区をフィールドとして研究を実施している坂本剛教授(名古屋産業大学・社会心理学)、八尾廣准教授(東京工芸大学・建築学)、佐藤憲行副教授(復旦大学・歴史学)らと、滝口を代表とする分野横断的な研究グループを組織した。本研究グループにより 2017 年度および 2018 年度に東北大学においてゲル地区をテーマとするシンポジウムを実施((5) 学会発表 および)。これらの成果をもとに、滝口を編著者とするゲル地区の居住に関する共著書籍の出版を現在準備中。

<引用文献>

滝口 良、土地所有者になるために、北方人文研究、2 巻、2009、43-61

滝口 良、つぎはぎの所有：社会主義体制下のモンゴルの都市部における「生の財産」と居住空間の構成、北海道民族学会、9 巻、2013、1-14

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

滝口 良、坂本 剛、井潤 裕、モンゴル・ウランバートルのゲル地区における住まいの変容と継承：都市定住に適應する遊牧の住文化に着目して、査読有、43 巻、住総研論文集、2017、173-184
https://doi.org/10.20803/jusokenronbun.43.0_173

坂本 剛、滝口 良、大沼 進、モンゴル牧畜社会の資源管理に関する環境心理学的考察：コモンズをめぐる境界と社会的アイデンティティ、査読有、3 巻 1 号、環境心理学研究、2015、1-10、
https://doi.org/10.20703/jenvpsy.3.1_1

〔学会発表〕(計 3 件)

滝口 良、分断する都市：ゲル地区管理の歴史比較から、東北アジア研究センター平成 29 年度公募型共同研究プロジェクト・シンポジウム「ウランバートル・ゲル地区における住まいの複層的調査を通じた都市環境問題解決方策の提言」、2017

滝口 良、モンゴルの都市居住における住まいと近隣の空間構造、東北アジア研究センター平成 28 年度公募型共同研究プロジェクト・シンポジウム「モンゴルの都市居住における住まいと近隣の空間構造」、2017

坂本 剛、滝口 良、Zorig Tuya、井潤 裕、ゲル地区再開発計画における社会関係資本の機能と形成：行政の介入による社会関係資本の形成に注目して、日本社会心理学会第 56 回大会、2015

〔図書〕(計 1 件)

Такигүчи Рёо(滝口 良)、Inline Printing、
хөгжил ба олон нийт (邦題：ゲル地区の発展とコミュニティ)、2016、63

〔その他〕

講演

滝口 良、「ゲル地区：発展か、建設か？」(モンゴル語)、名古屋大学アジアサテライトキャンパス主催サイエンス&カルチャートーク in モンゴル、2017

6. 研究組織

(1)研究代表者

滝口 良 (TAKIGUCHI RYO)
北海道大学・大学院文学研究科・共同研究員
研究者番号：50706760

(4)研究協力者

ゴンゴル バトドルジ (Gongor Batdorj)
ゾリグ トヤー (Zorig Tuya)